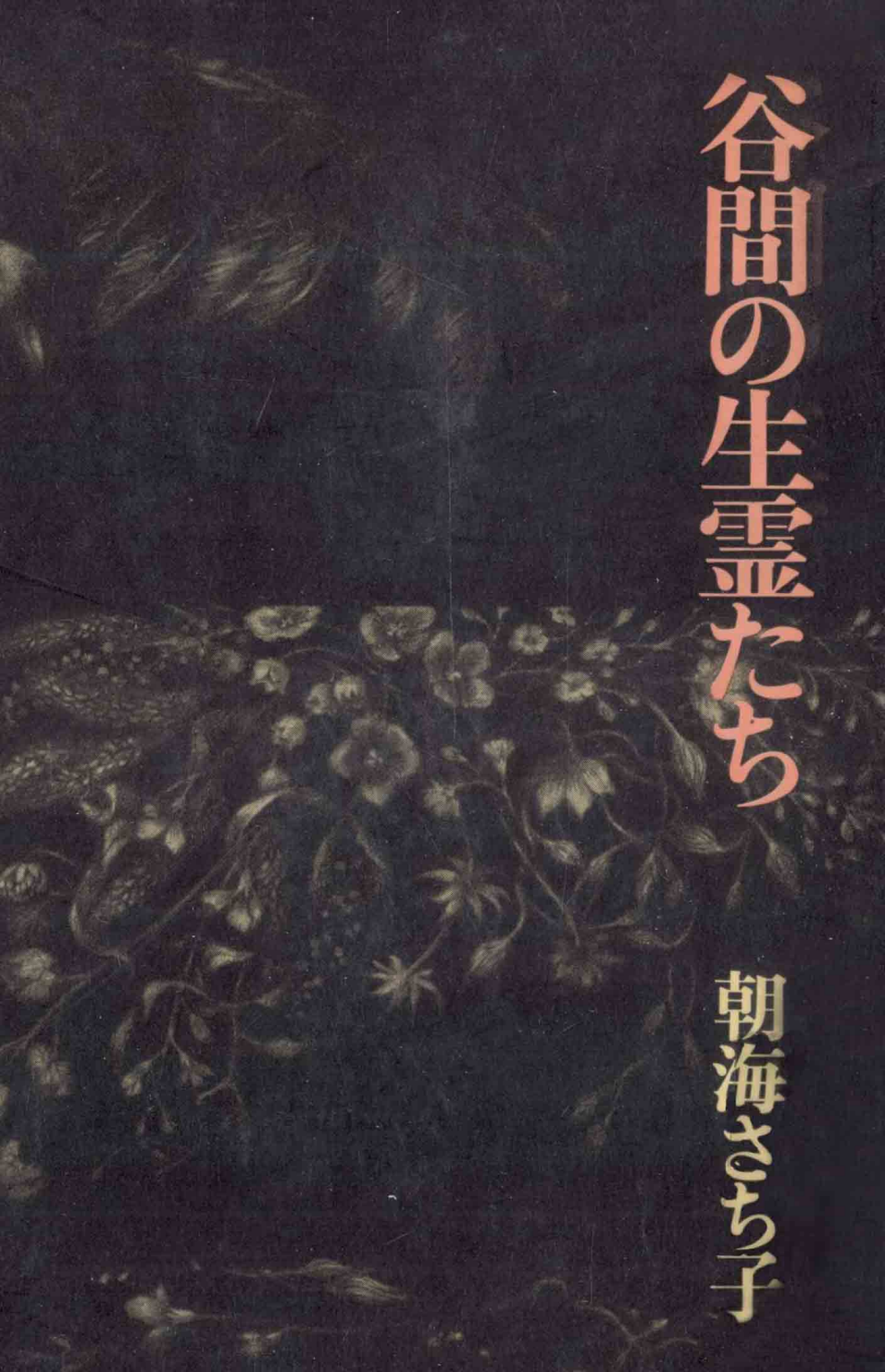




谷間の生霊たち

朝海さち子

谷間の生霊たち

朝海さち子

朝海さち子 (あさみ さちこ)

1938年、北海道に生まれる。慶応義塾大学医学部付属厚生女子学院を卒業。1974年、「谷間の生霊たち」で太宰治賞受賞。創作・評論・脚本・レコード作詞など、多方面で活躍している。

主な作品

創作：「コタンの春」「胎動期」「真杉静枝の生涯」

評論：「偶像、白衣の天使」（現代評論社賞）「女湯の旅」

脚本：「草原の若人たち」（新人脚本賞）「わたしたちは天使じゃない」

谷間^{せいわい}の生霊たち

1975年10月30日 第1刷発行

1976年10月15日 第4刷発行

著者／朝海さち子

発行者／井上達三

発行所／筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

TEL 東京291-7651 振替東京6-4123

印刷／厚德社 製本／永興舎

装幀者／味戸ケイコ

©Sachiko Asami 1975
Printed in Japan

〔分類〕0093〔製品〕80125〔出版社〕4604

目次

谷間の生霊たち

3

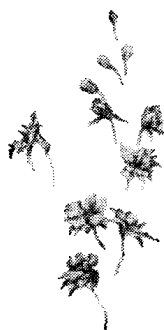
マリア

55

喪の季節

131

谷間の生霊たち



第十回 太宰治賞受賞

「文芸展望」一九七四年夏号

菜々枝は、毎日、十一時間はたつぷりと眠る。エチオピアの少年のような華奢な彼女の、信じ難いほどの丈夫さは、その熟睡の中から生れるのかも知れない。

その朝も、起床は、八時過ぎだった。

いつものように、ポチの朝食を作って縁側へ立つと、あたりは、レースのカーテンを拡げたような霜に被われていた。

散歩好きのポチは、日課にしている畠と森の境界線めぐりに出かけたのか、庭の霜柱を散々に踏み荒した小さな足跡は、白菜畠や蓮根池の向うへ消えている。縁側の横手からならかに続く傾斜畠のその先の山肌には、白い霧が立ちこめ、山腹をえぐって建ち並ぶ三棟の平屋の病舎や、ひよろりと背の高い五階建の看護婦寄宿舎は、まだ睡たげに、ぼやけ

て見える。

村里から疾走して来た赤い乗用車が一台、ただ一軒、ぽつんと建っている菜々枝の家の前を通過し、病院への坂道を登って行く。

病院の前で、その道が村の行き止まりと知ったらしい乗用車は、忙しくUターンし、痼癢を起したようにスピードをあげて戻ってくる。

「アーア。マタ、迷ッタノネ」

庭へ降り立った菜々枝は、歌うような調子でつぶやきながら縁先のポチの食器を探す。ふと、裏手の雑木林に人の気配がした。

「アレ……」

ポチが、異様な風態の男に頭をなでて貰っている。男は、はち切れそうな大きなリュックサックを背負い、水筒を下げ、帽子から靴まで登山者スタイルなのだが、どこことなく、しまりが無い。ジャンパーの前は、だらしなくはだけ、膝に大きなつぎの当ったGパンを穿き、そして、大きなズック袋を、後生大事にかかえている。

ボサボサ髪を肩まで垂らしたところなど、いつか、町の駅前で見かけたヒッピーのようだ。

菜々枝は、はじめ、髪の毛が長いので、女だと思った。ところが、振り向いた顔は、ひ

げもじゃなのだ。どうやらポチは、雑木林を散歩中に男と出会ったものらしい。

「ドコノ山へ行クノカナ……」

菜々枝は、首をかしげる。

町からは六キロもあるこの田舎の山麓に、病院やゴルフ場が出来てからというものの、トラクター、ダンプカー、救急車など、いろいろな車や人の往来で騒々しくなっていたが、登山者を見かけるのは、はじめてだった。沢も崖もあるにはあるが、どれも、陽なたばっこの太った猫の背のような、おだやかな山並みで、中には、頂上まで耕された山もあるのだ。

ポチと挨拶を交わした男は、菜々枝にちらっと会釈をし、そのまま、ゆっくり、山をめざして歩いて行く。

「ポチ、ゴハンヨ」

ポチは、全身に活気をみなぎらせ、横っ飛びに飛んでくる。

白黒の斑の雑種である。山ひとつ向うのゴルフ場の笹藪に息も絶え絶えに捨てられていた時は、菜々枝の指でつまめる程の小犬だったが、いまではすっかり成長し、菜々枝の家で、二回目の正月を迎えようとしている。

菜々枝は、ポチのあわただしい食事を見守りながら、いつものように鼻先にかがんでお

喋りを始める。

「アノネ、アノ、アノ、アタシ、今日ハネ、遅番^{スバ}ナノヨ。ダカラネ、アノ、アノ、ユックリタベテイデスヨ。アノ、アノネ。オカアサンハ、ホラ、知ッテイルデショウ。イツモ早番ダカラ、モウ、病院へ、アノ、行キマシタヨ。ソレカラネ、アノ、アノ、オジイサント、オバアサンハネ……」

昨年、成人式を終え、大人の仲間入りをした菜々枝だったが、たどたどしいそのお喋りは、喜劇の舞台に出てくる阿呆役者のようにどこことなく間が抜けている。

それに、紅を塗ったような赤い頬のふくらみや、邪気のない瞳のあどけなさは、どう見ても小学生の少女の域を出ていない。

食事中のポチは、菜々枝のお喋りに気を遣いながらも、そわそわ、よそ見をし始めた。家の前に停った車が、二度、三度と、しつこく警笛を鳴らしているのだ。

最前の赤い乗用車かと、菜々枝が振り向くと、黒塗りの乗用車が二台も並んでいる。

「おねえちゃん。新しく出来たゴルフ場は、この道だったかねえ……」

菜々枝は、またかといった物慣れた顔付で前へ進み出た。

「アノネ、アノ、アノ、チガイマスヨ。コノ道ハデスネ、アソコノ病院デ、終点デス。アノネ、ゴルフへ行ク道ハデスネ、アノ、アノ、ホラ、スコシ、モドツタトコロニネ、道ガ、

二ツニ別レイマシテネ……」

ゴルフ場の入口を示す、気取った立て看板は、菜々枝の祖父が作っているビニールハウスの花畠から、少し外れた丘の目立つ場所に立てられているのだが、初めての人々は、人里離れた山麓の急カーブを曲ったところで、忽然と現れる五階建の白塗の建物や、三列に並んだ平屋の病棟に眼を奪われ、立て看板はもとより、二股に分れたゴルフ場への道さえ、見落してしまうらしい。

病院もゴルフ場も、新設されてまだ日は浅いのだ。といっても、病院の歴史は、みすぼらしいバラックの時代から数えると、五年は越えており、ゴルフ場の基礎工事が始まったのもその頃だ。

「ちえっ、バックだ、バックだ」

と、一台目の、派手なチェックの背広の男は、後続の車に向って叫ぶ。

「あそこは、病院だとさ。こんな山奥に病院を建てるなんて、どういふつもりかなあ」

「結核療養所かなにかでしょうよ。ね、そうでしょう」

助手席の赤い帽子の女が、菜々枝に声をかける。

「病院だって、なんだって、俺たちにゃ関係ないよ」

せっかちらしい二台目の運転席の男は、いきなりエンジンをふかし立てる。

「ねえ、あの娘、すこし変だと思わない。どうも、頭が弱いみたいよ」

二台の乗用車は、相次いでバックして行く。

重症心身障害児施設の、山麓病院に、補助看護婦として勤める菜々枝の日々は、時を忘れるほどに充実して、明るいものだった。

遅番の日は、午前十一時までに出勤すればいいのだが、菜々枝は九時半を廻ると待ち切れずに病院へ急ぐ。

五年前に建てられた、木造平屋の病舎は、ペンキが剥げたり、窓わくが外れかかったりで、菜々枝の古い家よりも荒れが目立つ。すぐ隣りに、スマートな看護婦寄宿舎が新築されただけに、本館の三棟は一層みすばらしく映る。菜々枝の祖父の見立てによると、平屋の本館は、「飯場小屋なみの安普請」なのだそうだ。

いつものようにお供をして来たボチと別れ、ギーコ、ギーコゆれている玄関のドアを開けると、薄暗い待合室は、冷え冷えと鎮まり、人影もない。一般の病院と違って、大勢の患者が診察の順番を待つような光景は、ここでは見られないのだ。

小牧院長が週に二度ずつ診療している東京の大学病院で、特別に重症と診断された重症

心身障害児だけが、都心から三時間も離れたこの私設の病院へ送られてくるのである。

「オハヨウゴザイマス」

菜々枝は、受付や薬局のドアを開けて、いちいち丁寧に挨拶をする。

「おはよう菜々枝ちゃん！」

菜々枝を可愛がっている薬剤師の杉正子は、どんなに多忙な時でもドアまで出て菜々枝と握手を交わす。菜々枝もそれを楽しみにしている。

「おはよう！」

事務所の中からも一斉に挨拶が返る。菜々枝は薬局の続きにある院長室への挨拶も、決して欠かさない。

知恵おくれで、誰にも相手にされず、世間から隔離されて育った菜々枝を補助看護婦に採用したのは、小牧院長だった。病院の創立後間もなく、炊事場で働く事になった母親の腰巾着だった菜々枝は、炊事場の栄養士や看護婦たちに重宝に走り使いさせられているうち、院長の眼に止まったのだ。

純なやさしい性格は、病室の子らにもなつかれ、食事も忘れて子らの面倒を見るようになり、やがては、毎日欠かさず出勤するようになっていた。そんな菜々枝をいじらしく見ている院長は、菜々枝の雇用を思い立った。

最初は、病児たちの遊び相手になるだけでいいと考えた院長だったが、婦長の指導で、他の看護婦たちと大して差のない活躍ぶりを見せるようになった菜々枝に感心し、補助看護婦の資格を与えた。

「菜々枝がお役に立つのでしょいか。ほんとうでしょいか」

眼をうるませた母親は、菜々枝の給金は望まぬと言い張ったのだが、院長は、他の補助看護婦とあまり差のない給料を決めている。

「院長先生、オハヨウゴザイマス」

白髪の小牧院長は、不在だった。院長は、私費を投げ打って建てたこの山麓病院の経営の他に、重症心身障害児の実情を訴える講演や、陳情運動などで、席のあたたまる暇のない毎日なのだ。

院長が不在でも、菜々枝は、机に向って深々と頭を下げる。時には、祖父の毎朝の神棚札拝をまね、パン、パンと拍手を打って最敬礼し、院長をあわてさせることもある。

院長室を出ると、菜々枝は、脇目もふらず更衣室へ急ぐ。病院から支給された白衣や、白いキャップを早く身につけたいのである。

化粧をしたり着飾ったりの、女らしいおしゃれには無関心な菜々枝だったが、白衣に着替える時だけは取りすまして鏡の前に立つ。そして、白づくめに変身する自分が、後光に

照らされた天使にでもなったような、誇らしい気持ちに包まれるのだ。

長い廊下を渡って病室へ入ると、消毒液の臭いや、暖房用の石油ストーブの臭い、大小便の臭いなどが、わあっと菜々枝に押し寄せる。尿の臭気が特に強いのは、患者たちが部厚いおむつをぬらしている時刻なのだ。

「ミナサン、オハヨウゴザイマス」

元氣いっぱい菜々枝の挨拶に、どこからも応答はなかった。

家庭のベビーベッドのように、柵をめぐらされた特殊なベッド群の中から、
「う、う」

と、弱々しいうめき声が洩れただけであつた。

菜々枝の所属するA病棟の患者の殆んどが聾啞者で、盲目で、その上、白痴で、手足の機能障害まで重なり、三重苦のヘレン・ケラーよりも重症な患者ばかりだったから、菜々枝の挨拶に返事が返らないのは当然だった。

菜々枝は、眉をひそめ、病室の中央にある看護婦詰所に立つて、広い病室の隅から隅まで念入りに見渡した。

応答がないはずだ。三十六のベッドの間に看護婦は一人もいなかった。

「ヘンダナア……」

菜々枝は独り言を呟く。

病室に看護婦が一人もいないということは、これまでになかったことだ。早番の四人に遅番の一人が加わり、合わせて五人の看護婦が昼間はいるはずで、だれか一人でも残っていないければ、重症児たちが嘔吐したり喉を詰まらせたりした時、取り返しのつかない大事になることがあるのだ。小走りに病室を出た菜々枝は、軽症患者の收容されている隣りのB病棟を覗いてみた。静寂なA病棟とは違い、B病棟もその向いのC病棟もオーケストラが一斉に鳴り出したような賑やかさだ。どうしたことかやはり白衣の姿は見られず、事務の若い男がベッドの間を走り廻る病児たちの遊び相手になっている。

「ヘンダナァ……」

菜々枝に、あれこれ考えをめぐらす余裕はなかった。遅番出勤者が早番と合流してまず手がけなければならないのは、三十六名の患者のおむつ交換であった。それが遅れば患者の昼食が遅れ、さらに午後からの仕事、順送りに遅れることになる。

いつもとは違った病室の気配に、菜々枝は一時間半も早く出勤した事を忘れ、ともかくスケジュール通りの仕事に取りかかった。

「サア、ミナサン、アノ、アノ、オムツノ時間デスヨ。オムツヲ取り替エマシヨウネ」

白衣を身につけた瞬間から片時もじっとはしていられない菜々枝なのだ。まず、慣れた